異類婚姻譚に見る日本人の自然観について
―日本人は動物をどのように見てきたか―

名　本　光　男

１．はじめに

人類は、産業革命を踏み台にして、未曾有の物質的繁栄を手中に収めるようになったが、その一方で、自身の生存をも脅かすような、環境汚染・環境破壊・資源問題・人口問題・南北問題等の環境問題の蓄積をも許すことになった*1。

このような環境問題に対する人々の危機感の高まりの中で、伝統的な社会における人と自然の関わり方の中に、今後の自然との関わり方を模索しようとする動きが見られるようになってきた。さらには、伝統社会に生きる人々の自然利用はもとより日々の生活、そして、それらを含んだ地域の文化全体に通底するものとして、人々が四囲の自然をどのように認識してきたのかという問題が注目されつつある*2。

このような問題意識を背景として、本稿は、日本の昔話の中でも、特に人間と他の動物たちが婚姻関係を結ぶ異類婚姻譚に焦点をあてることによって、日本列島に居住してきた人々がどのように自然を認識してきたのかについて、探ろうとするものである。

民間に流布する口承文芸である昔話は、それが語られる地域社会の価値観や世界観に合致するものだけが語り伝えられ、そうでないものは忘れ去られるか、そこの価値観や世界観に沿った形で、話の内容が変えられてしまうという特徴を持っている*3。そして、一度忘れられた話は、それが口承文芸であるが故に後世に伝えられることはない。

一方、地域社会に受け入れられた昔話は、そこで生きていくための教訓を内包しているが故に*4、聞き手は、登場人物のうち、誰がどういうことをして幸福になり、誰がひどい目にあうのか等を繰り返し聞いているうちに、話中に内在する価値観や世界観を心の奥深くに刻み込み、それに基づいて行動するようになることが期待される*5。同時に、昔話にはそれを語り伝える人々が、彼らの住む社会の価値観や世界観を再確認するという機能もあったとも言えるだろう*6。

---

*1〔掛谷　1990:281、参照〕

*2〔松井　2000、参照〕

*3 川森は、昔話は、比較的閉鎖的で、その社会独自の伝統を保持している、いわゆる「民俗社会」の検閲を受けることによって、ある作品は受け入れられ、ある作品は排除されると記している〔川森　2000:12-18〕。

*4 昔話は民俗社会の要求によって、教訓的要素を内包している〔小澤 1974:35-55〕。

*5 子どもの行動がその社会の期待に合致したものになるように形をととのえてやる行為を「水路づけ」という〔ボック 1977:142〕。

*6 桜井によれば、昔話は、「民族全体の生活そのもののなかから生まれ、かつ成長してきた財産である」が故に、「昔ばなしのなかには、それぞれの民族が経てきた生活なり、人生観なり、世界観なりがおのずとにじみ出ていることになる。つまり、昔ばなしが描写する世界の奥そこに、その民族の歴史的・社会的・精神的背景が潜在している」という〔桜井　1996:49〕。また、アイヌにおいては、昔話と同様の機能を神話が有している。アイヌの人々は、神話によって、この世界に生きる態度を学び、「幸せや不幸の源泉がどこにあるのかが示さ

したがって、動物の登場する動物譚を丹念に見ていけば、人々にとって動物や自然がどのような存在であり、どのように接すべきかがそこには内包されていると考えるのである。

２．自然に敬意を払う昔話

日本に現在まで伝えられている昔話の中で、動物が登場する動物譚は、全国各地で数多く採集されているが、いずれの昔話においても、そこに登場する動物たちは、我々と同様の生活をし、我々と同じ世界に居住する者同士のように交流し、「舌切り雀」「鶴女房」等に見られるように、接し方さえ間違えなければ、豊かな恵みを供給してくれる存在として描かれている場合が多い*7。

一方、彼らに対して、不遜な態度をとったり、騙したりすると、多くの場合、悲惨な、場合によってはかなり残酷な結末を迎えてしまう。例えば「舌切り雀」のなかで、雀をだました「婆」の末路が、それを象徴的に教示している*8。

そして、彼ら、野性動物たちの生息する人里離れた山は、日本人の象徴的宇宙の中では神々の住む場所とされ、「舌切雀」の雀や「鶴女房」の鶴などは、山に住む神そのもの、あるいは神の使いであるとして、我々に富を与えてくれるのは、里から遠く離れた山や水に住む神々＝「マレビト」であるとされている*9。また、佐々木によると、山のすべてを支配しているのが山ノ神であるとして、その支配と加護の下で、人々はあらゆる生業活動を営み、生活しているのだという。そして、人々は「神々に怖れと敬いを抱き、山そのものを神のすみ家とみて、それを厚く尊崇する自然観・宗教観を生み出してきた」のだと結論づけている*10。

このように、人里離れた山中を神の住む特別の場所であると考え、さまざまな儀礼を含む多くの民俗事例を我々に提供してくれているのは、山中を活動の拠点としていた人々であった。

奥深い山中で、動物等の捕獲－特にクマ狩り－によって生計を立てていたマタギ達は、山中で１年を過ごすクマについて、次のように語りながら、自然に対する畏敬の念を表している。

> 「（クマは*11）山の獣では一番山の神に近いところにいるんださがで、山の中では人間より賢い訳だ。（中略）体ひとつで自然の中で生きていげる力持っているんださがで、凄いもんなんだ」*12

れ、不幸な状態を避けるためにとらなくてはならない態度が示される」のだという〔西田 1989:82〕。昔話と神話の違いは、大きな問題ではあるが、日々の生活の中でとるべき態度が内包されていると言う点は共通している。

*7 大貫によれば、富をもたらす者の条件として、「よそもの（動物の姿をとる場合が少なくない）であること、このよそものは村の外に住むこと、それが川、海、沼の底の場合もあれば、深い山奥の場合もある」とし、富を得る者の条件として、「正直者であるとか、動物に慈悲深いとか、ともかく善良であること、富はその善良さに対するほうびとしてもたらされる」という〔大貫 1995:122〕。

*8 〔関　1988:72-76、参照〕

*9 〔大貫　1995:123-124、参照〕

*10 佐々木によれば、山ノ神は山地で営まれるきわめて多様な生業活動のすべてにかかわる生産神であるという〔佐々木 1993:258〕。

*11 筆者注

*12 〔田口 2001:156〕

かつて山と深く関わって生きてきた人びとにとって、動物たちは、同じ地域に住む、極めて身近な「仲間」であったし、自然の中で一生を過ごす能力を持った、敬意を払うべき存在でもあったのである。

昔話において、そこに登場する動物たちが、我々にとって身近な存在として描かれているのは、我々の祖先が、自然や動物、そして神々の住む世界と密接に関係性を保ちつつ、生存を維持してきたからだと考えてもよいと思われる。

柳田は、「山の人生」の中で、山中で生計を維持している事例を数多く紹介しており、例えば、相州で保護された少年の話を紹介しているが、ここでは衣食住についての記述を紹介したい。

> 「春が來ると、色々の樹の芽を摘んで其まゝ食べ、冬は草の根を掘つて食べたが、其中には至つて味の佳いものもあり、年中食物には聊かの不自由もしなかつた、衣服は寒くなると小さな獣の皮に、木の葉などを綴つて着たと云ふ。（後略）」*13

また、内山によると、彼が居を構える群馬県の山村には、かつて、「山上がり」という習慣があったという。それは、村人が借金などで生活が困窮すると、数年間、山の中で暮らす行為で、その間に、家族の中で余裕のある者が町に出て、稼ぎを得て借金を返す。そして、返済が終わると、里に戻ってきて、以前と同じ生活に戻るのだという。自然のなかで暮らしたことのない者にとって、「山上がり」は借金取りから逃れるための惨めな逃避行にしか思えないが、村人にとって、山での生活は、案外気楽で、快適なものであったという。当時の人々は、木を伐採して、瞬く間に小屋を作ることが可能であったし、誰もが山の恵みを利用する知恵と技術を身につけていたのである*14。

いずれにしても、時間の特定は極めて困難といわざるを得ないが、少なくとも民俗学の分野で収集されてきた事例を見る限りにおいて、山の資源を生活に幅広く利用していたという点で、かつての人々にとって、山は現代に生きる我々よりも遙かに身近な場所であったと言えるのではないだろうか。

３．自然を裏切る昔話

前述のように、日本の昔話はそこに登場する動物たちに対して、親切に対応することによって富を得るものが多いが、なかには主人公が動物に対してきわめて残酷な態度をとるにもかかわらず幸福になってしまう話も存在している。次に、その一例として「猿聟入」を紹介したい。

この話は、からからに乾いてしまった田んぼを前にして、爺さまの困り果てている姿から始まる。そして、その田んぼに水がかからない限り、田植えもできず、いずれ彼と彼の家族は飢えて苦しむのは目に見えている。

爺さまの困り果てている姿を見つけてやってきたのは猿であった。猿は、爺さまに、「田んぼに水をひいてやるから、その代わりにその娘一人、おれにくれないか」と提案する。そして、絶望の淵にいた爺さまがふともらした「それじゃあ、娘をやるから、どうか水をかけておくれ」という言葉を聞いた猿は、爺さまの広大な田んぼに一晩で水をかけ、その仕事の報酬として末娘を嫁にもらい、喜び

*13 〔柳田 1968:61〕
*14 〔内山 2005: 36-38、参照〕

ながら嫁を連れて自分の家に帰っていく*15。

ところが、物語は意外な方向へと進んでいく。

末娘が猿の家に来て三日目に、きわめて善良な猿は爺さまのところに里帰りをしようと提案する。その時に爺さまへのみやげは何がよいかと嫁に尋ねると、臼で搗いたままの餅がよいという。猿は嫁のいうことを何の疑いもなく聞き入れて、重い臼を背負って爺さまの元に出かけていく。そして、谷川で「美しい花」を所望する嫁の言うがまま、猿は、細い枝の先まで登ると、その枝が折れて、谷川に落ちて死んでしまうのである*16。

この「猿聟入」の背景にある教訓は、一般には、借りたくもない者の力を借りなければならないほど厳しかったかつての農作業の有様を決して忘れてはならない、そして、子どもは親の犠牲になってでも親孝行をしなければならない、そして、それを守りさえすれば必ず幸福になれるというのである*17。

しかし、爺さまと猿との間に交わされた、「田んぼに水を引く代わりに娘を嫁にやる」という約束にしたがって猿の嫁になった末娘によって、何の罪もない猿が騙され、ついには殺害されてしまう点は、日本に伝わる他の動物譚と比較して、かなり特異であると言わざるを得ない。なぜならば、一般的な昔話ならば、猿を騙した娘に天罰が下って話が終わるべきところ、この話では逆にその後幸せに暮らしたとなっているからである。

では、なぜ末娘は、善良な猿を殺さなければならなかったのだろうか。小松はその理由を次のように説明する。

> 「私たちの前に浮かび上がってくるのが、爺と末娘の間の強固な『親子の絆』である。この家庭内的な絆、さらにこれに暗示されている『人間社会』内部に住む人びとの間の絆は、この昔話では、『異類社会』との間の等価交換*18と対立するものとして提示されているのである。
>
> （中略）
>
> 上の二人の娘がいやだと断わる聟入りの話を喜んで引き受けたのは、いうまでもないことであるが、猿の聟になるための喜びではなく、親を救うことができる、親孝行ができるということの喜びなのである。
>
> （中略）
>
> ここで物語は、『異類世界』と『人間世界』との間の関係、つまりそれを具現化した『猿』と『爺』の関係から『夫』（猿）と『妻』（末娘）という夫婦関係に転換される。猿の『妻』に満足しない末娘は、なんとか『夫』から逃れようとする。そこで、物語は夫婦関係の次元から知恵の優劣関係の次元へと転換し、夫の『愚かさ』、妻の『賢さ』という対立が現れることになる。さらにこの対

---

*15 爺さまの前に姿を現した猿は、普通の人間には一晩で広大な水田に水をひくことなど到底できないのであるから、そうしたことができる者は、超人的な力を持った人間、もしくは、神や妖怪など人間以外の世界に属する者なのである。つまり、猿は、人間世界ではなくて異類世界に住む者であったのいうことができよう〔小松 1985:149、参照〕。

*16 〔関　1988:72-76、参照〕

*17 〔小松 1985:144、参照〕

*18 田んぼでの労働と嫁の交換。

立は、『愚かさ』＝『悪』、『賢さ』＝『善』という具合に、（人間にとっての*19）善悪の対立の次元へと置換されることになるわけである。かくして『悪』は滅ぼされ、『善』は勝利（＝生）するという物語の結論が導かれることになるのである」*20

しかしながら、日本で採集された民俗資料を見ても明らかなように、日本に住む人々は、かつて、自然に対して、祈り、恐れ、感謝し、共生してきたのではなかったのか。また、筆者は、先に、山の中を自由に駆け回り、獣たちを捕らえる生活を続けてきたマタギが、動物たちを決して「知恵のない愚かもの」とは見なしてはいなかったことを紹介している。

さらにいえば、昔話に数多く登場する鼠、猿、雀などの、いわゆる「異類」たちは、話中では決して「悪」としては描かれてはいない。そして、多くの動物譚において、「異類」たちに対して、心のやさしい「爺」は常に誠心誠意、親切に対応し、対して動物たちは恩を返し、話はめでたく終わっているのである。

だが、きわめて残酷な形で自然を裏切り、その上それを「めでたし、めでたし」と語ってしまう「猿聟入」の話がわが国に広く伝承されてきたのも、また揺るぎがたい事実なのである。

そこで、筆者がこの話に触れて、連想するのは、かつて、津軽地方で聞き取り調査をしていた際に聞いた、次のような水田耕作に関する話であった。

「春に田んぼを耕し始めるにあたって、最も重要な作業は田のクロ（畦）をしっかりと切り離すことだという。すなわち田んぼの耕作面と回りのクロの間に鍬やタチと呼ばれる農具でできるだけ深い溝を切り込むのである。この作業によって田んぼと周囲の自然がしっかりと切り離され、雑草が田んぼに入り込みにくくなるのだという。

つまり、この作業は田＝人工物と、雑草＝自然をしっかりと切り離す作業なのである。そして、このことは、そのまま、我が国における人間と自然との関係を表現しているように思われるのである」*21

すなわち、多くの昔話で、動物を私たちと共に生きる仲間であると語りながら、実際には、私たちと動物の間には何らかの「溝」があるのではないかと考えるのである。

４．礼節をもって人間と接する「鶴女房」

次に、結末のまったく異なる話として、もう一つの典型的な異類婚姻譚である「鶴女房」を検討しながら、日本における人間と動物の関係を改めて考察してみる。さらには、「猿聟入」「鶴女房」の二つの話が同時に存在する背景を考えてみたい。

助けられた鶴が女房となり、機織りをして恩返しをするというこの話は、劇作家木下順二が民話劇「夕鶴」として再話することによって、有名な昔話の一つとなった。そして、その分布も日本全国に

*19 筆者注
*20 〔小松 1985: 151-154〕
*21 〔名本 2005:172-173〕

わたっていて、現在 110 話が報告されている*22。

この話は、正月を故郷で過ごそうと道を急いでいるある若者が、一羽の美しい鳥を捕まえて騒いでいる人々を見つけるところから、話が展開しはじめる。

その場面で若者は、町で汗水流して稼いだ約一年分の給金をすべてはたいてその鳥を買い取る。さらに、「おれが命が惜しいように、この鳥も命が惜しかろう、おれの親がおれを待っているように、この鳥の親もこの鳥を待っているだろう」と考え、この鳥を逃がしてしまう。

若者によって助けられた鶴は、すぐに美しい女の姿に化けて、彼の家を訪ね、無理を言って彼の嫁となる。

そして、若者との慎ましくも幸せな生活を送る一方で、かつて命を助けてもらった恩に報いるために、自分の羽を抜いて、それを織り込みながら布を織り、若者に町まで売りに行かせる。

しかし、そのような生活も長くは続かない。自分の正体を隠し通すことができなくなった女は、ついに若者に自分がかつて助けてもらった鶴であることを告白する。そして、嘆き悲しむ若者と彼の両親を振り払って飛び去ってしまう。だが、高価な布を織るために自分の羽を三年間にわたって抜き続けた鶴には、空高く舞い上がるだけの羽が残ってはいなかった。そのため、ほとんど飛ぶことができずに力つきて死んでしまうのである*23。

この話と、先に紹介した「猿聟入」とは全く性格の異なる話のようにも見えるが、この二つの話には大きな共通点がある。それは、人間と動物＝異類が「婚姻関係」を結ぶという点である。

「猿聟入」では、猿が爺さまの末娘を嫁にするが、この話では立場が逆転し、若者の許に鶴が現れ、嫁となる。しかし、猿がそのままの姿で人間に近づいたのに対して、鶴は、自分の正体がばれないように人間の姿に化けて人間社会に潜り込む。

一方、「猿聟入」の猿は、確かに農作業に困り果てていた爺さまを助け、嫁となった末娘の気に入るように最大限の努力はする。しかし、姿形は常に猿のままで、自分が人間たちと同類であるかのように振る舞う。「鶴女房」の鶴がとても控えめで礼節をもって人間に接しているのに対して、猿は確かに心優しくお人好しではあるが、あまりにも無遠慮に人間の世界に踏み込んでいるように思われる。

この二つの物語を比較してみると、その死を悼まれ、大事に葬られた鶴と欺かれて殺されてしまった猿の違いは、人間世界に入り込む際に「化身」するかどうかにあるように思われるのである*24。猿は化身することなしに人間界に現れ、鶴は人間に化身して、人間界に現れている。筆者は、ここに人間と動物の交流の方法が隠されていると思われるのである。では、果たして我々の祖先は、人間と動物の交流をどのように考えていたのだろうか。

---

*22 〔宮岡　1994:605-606〕

*23 〔関　1988:201-204、参照〕

*24 川森は、「異類女房は正体が露見して人間界から去っていくだけであるが、異類聟の場合、単に婚姻が破綻するだけではなく、人間の側の計略によって殺害される。」とまとめているが、その原因については触れていない〔川森 2000:32-33〕。

５．自然界と人間界の交流について

自然から遠く離れて暮らしている我々と比べて*25、自然に囲まれて暮らしてきた我々の祖先は、前述したように、自然に対して大いなるおそれを抱いて接してきた。自然の中でも特に山中はこの世とは別個の世界であると考え、そこで労働し生活するためには、特別に強烈な信仰と緊張が必要であったのである*26。

たとえば、山の中を自由自在に駆け抜けていたマタギたちは、山に入るときは山神に「山をしばらくの間お騒がせします」と一言ことわりを入れてから山と里との境界線を越えてきたという*27。

そして、そこに一歩でも足を踏み入れたとたんに、平地での言葉、すなわちノラコトバと異なった言葉である山言葉を用いた。一方、里に帰ればノラコトバのみを用いて山言葉を忌んできた*28。万が一、間違って山中でノラコトバを使用してしまった場合は、水ごりをさせられたという*29。

これらの山言葉、ノラコトバの存在は、山が、実は私たちの住んでいる世界とは異なった「異界」であることを強調したものであった。そのために、必要な時に必要なだけ「異界」に入り込み、活動する。そして、そこの行き来にも厳しい規制を加える。それが我々の祖先が長く続けてきた自然との関わり方だったのである。

山形のマタギである小池千秋さんによると、

「三面（みおもて）ではクマ獲れば山で皮を剥いで、四肢をばらして村さ持って来る訳だ。そして分配する前に『身どり』っていうことするんさ。骨から肉を取るっていうことだどもな。そういう段取りでやってるんさ。

それに山の決まりでクマを丸ごと村の中に入れてはいけねぇんさな。どうしても丸のまま入れる場合は皮目を立てるか、その恰好だけでもせんばねぇ訳だ。そういう決まりがあるんさな。

（中略）

どうして丸のまま入れてはいけねぇかっていうと、人間と同じようにはしないっていうことなんさ。もし、人間に不幸があった場合にはそのまま村の中へ入れるども、獣に対してはそういう扱いはしないっていうことなんさ。これは別にクマに限ったことではねぇどもな」*30

---

*25 川喜田によれば、文化とは、環境とヒトの間に存在するものであり、より自然に直接的に対応する技術の層から社会やヒトに密着した価値観・世界観の層まで、いくつもの層が重層的に我々を包んでいるという〔川喜田　1979:214〕。現代社会に生きる我々が、自然を極めて遠い存在であると認識するようになったのは、距離的な問題もさることながら、我々と自然との間にある文化の層が、かつてよりも厚くなったことにも原因があると思われる。

*26 大林によれば、山の一定の地点から上が山の神の支配領域で、それから下は俗界という領域区分であったという〔大林 1983:47〕

*27 〔名本 2005:179〕　また、大林によれば、越後赤谷村の猟師たちは、狩山に入る場合は途中にある山神祠のある場所を里と山との境と見ていて、山に狩りに入る場合は、この祠に燈明をあげて、身の安泰と豊猟を祈願するという。そして、この境を越えて山神の領域に入ると山言葉を使うのが掟だったという〔大林 1983:47〕。

*28 山中で伐採業に携わっている人々も山言葉を使用していたことが報告されている〔千葉 1993:173〕。

*29 青森県の西目屋マタギの間では、「コウリトリをする」といって頭にワッパ（弁当箱）で水をかけられたのだという〔齋藤、牧田、瀬上 1988:127〕。

*30 〔田口 2001:141〕

マタギが山でクマを獲った場合でも、決してそのままでは持ち込まず、必ずその場で解体して村まで運び、村で分配したのだという。

また、山中に火を放つ生業である焼畑に関しても、山中で焼畑を作る場合は山の神に祈って土地の使用を許可してもらうための儀礼が行われたのだという*31。

このような多くの民俗事例を見るに、人々にとって、山中は、里とは異なる「異界」であると認識されることが多かったと言えよう。全く別の世界であると意識され、厳しく分けられていた人間界と自然界の間を、我々の祖先は行ったり来たりしながら生きてきたのであった。

だからこそ、自分を助けた若者に会うために、「鶴女房」の鶴は人の姿に化けなければならなかったし、ひとたびその正体が明らかになったならば、できるだけ早くそこから立ち去らなければならなかったのである。かぐや姫も月の世界に帰り、雪女も男の許を去ってしまうのである。また、逆に異界を旅した「舌切り雀」の爺も浦島太郎も、結局は自分の世界に戻っていく。

それに対して、人間の世界と自分の世界が深い「溝」によって隔たれていて、お互いの世界に深く関わってはいけないことに全く気づかなかった「猿聟入り」の猿は、その「鈍感さ」ゆえに殺されてしまったとは解釈できないであろうか。

６．おわりに

山村に暮らす内山がその著書で著した、山村での暮らしの中で体験した、人と自然との共生は、お互いの息づかいに耳をそばだてながらのゆったりとしたものであることは確かだろう*32。

しかし、それは、それぞれがそれぞれの世界にいて、決してもう一方の世界には深入りしないという約束事が守られているかぎりの幸せなのではないか。その暗黙の約束事をわきまえることのできなかった猿は騙されたあげくに殺され、それを自覚していた鶴は愛する夫との悲しい別れとつらい最期を遂げてしまったにも関わらず、結局は大事に祀られたとはいえないだろうか。

本稿で取り上げた二つの異類婚姻譚を詳細に見てみると、そこから見えてくる教訓は、動物たちと私たちは身近な環境の中で生きているかのように見えるが、実は彼らは彼らの世界を生き、私たちは私たちの世界を生き、お互いの懐深くには決して立ち入るべきではないというもののように思えるのである。

しかし、このような教訓が二つの昔話から導き出されるとしても、異界に住む動物たちに対しての意識に関しては、地域、そして時代ごとにかなりの差異が存在すると考えられるのである。

小澤は、「猿聟入」を分析した後で、この物語から、日本人がどのように自然を考えていたのかについて、次のように述べている。すなわち、「周囲の自然からの不思議な力に対して如何に強い警戒心をもっていたかを示すといえよう。周囲の自然と自分たちの世界との境界線をきつく築きあげてい

*31 〔千葉 1983:202-203、参照〕
*32 〔内山 2001、参照〕

たのである*33」という。

確かに、我が国の多くの地域は、長らく農耕を主たる生業としてきたが故に、周囲の自然界からの侵入者に収穫物を略奪されることも多く、それを阻止することに腐心してきたことも事実であろう。そのような地域にあっては、確かに、「猿聟入」の猿も「鶴女房」の鶴も、人間に敵対する「異界」からの侵入者として、断固として排除すべき存在であったと言うことができよう。

これに関連して、多くの地域で、そこに侵入してくる、いわゆる「異人」や「異類」を歓待すべきであるとする慣習を保持していたのは、人々がそれらを潜在的に恐れていて、もし虐待したならば神秘的制裁を受けると考えていたためであって、逆に言えば、人々は彼らに〈敵意〉や〈殺意〉をいだいていたということを意味しているという見解もある*34。これも、異界からの侵入し、人間の生活を脅かす動物たちに対する敵意がその根底にあると思われるのである。

また、あくまでも推察の域を出ないが、地域内すべてに人工林の広がる地域、または、地域内の山域すべての山林を伐採してしまい、見渡す限りはげ山と化してしまった地域*35においては、マタギのような、いわゆる特殊な技能を伝統的に保持してきた人々のみが立ち入ることを許されてきたような「異界」を持たないが故に、おそれるべき神も存在せず、そこに生息する動物たちを詳細に観察することもあまりなかったであろうから、彼らに対して一目置くということも少なかったと思われる。そのような地域においては、人に対峙する存在としての自然が存在せず、またそれを保護すべき義務も存在しない以上、それらを徹底的に破壊、または搾取することに対して、何の躊躇もしないのは当然だと思われる。そのため、例えば、戦後の復興期から高度経済成長期において、全国の山間地域で、なんの躊躇もなく、天然林を皆伐し、その跡に地域の自然環境を全く無視した形で、スギ・ヒノキ等を植林して、地域の植生が一変しても、地域住民の多くが心を痛めることがなかったのは、我が国において、「自然」という概念が、歴史的に存在してこなかったことと関係していると思われる*36。

一方、柳田の「遠野物語」に所収されている、殺された馬と夫婦になった娘の話*37は、人間と異類の婚姻が必ずしも破綻していないという点で、このような伝承を保持している地域の人々が動物たちを、これまで考察してきた地域とは異なったものとして認識してきたとも考えられるのである。

わずか二種類の昔話から、日本人が自然をどのように考えていたかということを導き出すことはあまりにも無謀なことであったかもしれない*38。しかしながら、これを出発点として、地域ごとの昔話に内

---

*33 〔小澤 1994:245〕

*34〔小松 1985:71〕

*35〔千葉 1991、参照〕

*36 百川は、我が国においては「人間の次元のいわば〈内的自然〉を自然界という意味でのいわば〈外的自然〉とが截然と区別されずにいた。従って、区別を止揚する全体性としての自然という観念も生じなかった」とし、さらには西欧と比較して、「人工という観念が理解できなければ、その反対の自然という観念もじつは理解できない」と結論づけている〔百川 1995:237-238〕。また、 渡辺は、「歴史上、長いこと自然の中に浸っているという状態で過ごしてきた日本人には、いまだに自然と人工のはっきりした区別が欠けていて、両者の境界線が極めて曖昧である」という〔渡辺 1995:340〕。

*37〔柳田 1968:30-31〕

*38 篠原は、自然観の研究に関して、「自然観に差異をもたらすものとして自然観の階層性や地域性や歴史性の差異を明確にしなければ、ひとしなみに「日本人の自然観」という空虚な論に陥ることは必然である」と記している〔篠原 1995:271〕。

在する価値観・世界観を、それぞれの地域の自然環境、生業、歴史等のなかで考察することによって、日本列島に居住する人々が、彼らの周囲の自然をどのように認識してきたかを導き出すことは可能であると考えているが、その作業に関しては後日を期したい。

【参照文献】

内山節

2001　『里の在処』　新潮社

2005　『「里」という思想』　新潮社

大貫恵美子

1995　『コメの人類学』　岩波書店

大林太良

1983　「海と山に生きる―その生態・生業と文化―」　『日本民俗文化体系　第五巻　山民と海民―非平地民の生活と伝承―』　pp.1-64、小学館

小澤俊夫

1974　「語り手と教訓」　『成城文芸』71、pp.35-55

1994　『昔話のコスモロジー』　講談社

掛谷誠

1996　「文化生態学」　『環境科学　Ⅲ　測定と評価』　河村武、橋本道夫（編）、pp.281-295、朝倉書店

川喜田二郎

1979　「文明批判としてのもう一つの技術」　『もう一つの技術』　総合研究開発機構（編）、pp.204-230、学陽書房

川森博司

2000　『日本昔話の構造と語り手』　大阪大学出版会

小松和彦

1985　『異人論－民俗社会の心性』　青土社

齋藤宗勝、牧田肇、瀬上景子

1988　「西目屋村砂子瀬の一人のマタギが有する植物を中心とした自然の知識」『白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究　平成元年度科学研究費補助金（総合 A）研究成果報告書』　pp.103-152、弘前大学人文学部

桜井徳太郎

1996　『昔話の民俗学』　講談社

佐々木高明

1993　「畑作文化と稲作文化」　『岩波講座　日本通史　第 1 巻　日本列島と人類社会』　pp.225-263、岩波書店

篠原徹

1995　『海と山の民俗自然誌』　吉川弘文館

関敬吾

1988　『日本昔話大成　第２巻　本格昔話一』　角川書店

田口洋美

2001　『越後三面山人記―マタギの自然観に習う』　農山漁村文化協会

千葉徳爾

1983　「山の民俗」　『日本民俗文化体系　第五巻　山民と海民―非平地民の生活と伝承―』　pp.173-216、小学館

1991　『増補改訂　はげ山の研究』　そしえて

1993　「山の生活」　『岩波講座　日本通史　第１巻　日本列島と人類社会』　pp.153-183、岩波書店

名本光男

2005　『ぐうたら学入門』　中央公論新社

西田正規

1989　『縄文の生態史観』　東京大学出版会

ボック、フィリップ

1977　『現代文化人類学入門（一）』　江淵一公（訳）、講談社

福田晃

1994　「猿聟入」　『〔縮刷版〕日本昔話事典』　稲田浩二、大島建彦、川端豊彦、福田晃（編）、　pp.396-398、弘文堂

松井健

2000　「序」　『自然観の人類学』　松井健（編）、pp.1-12、榕樹書林

宮岡洋子

1994　「鶴女房」　『〔縮刷版〕日本昔話事典』　稲田浩二、大島建彦、川端豊彦、福田晃（編）、　pp.605-606、弘文堂

柳田國男

1968　『定本　柳田國男集第四巻（新装版）』　筑摩書房

百川敬仁

1995　「国学者の自然観」　『日本人の自然観』　伊東俊太郎（編）、pp.231-262、河出書房新社

渡辺正雄

1995　「近代における日本人の自然観－西洋との比較において」　『日本人の自然観』　伊東俊太郎（編）、pp.329-370、河出書房新社

How does the Japanese folktale perceive the nature?
—How does the Japanese think about animals?—

Mitsuo Namoto

Abstract

This paper is an attempt to consider about how the Japanese perceive the nature. In this paper I examine two Japanese folk tales "*Saru-mukoiri*" and "*Tsuru-nyobo*," which have been handed down in Japan, employing results of folkloric research. The sense of values and the world perception observed in these two old tales suggest that our ancestors, while using the nature for their survival for long time, thought that the nature was the world that was entirely different from the world where the humans lived. They considered the nature as the place where Gods lived and had the feeling of awe. They always kept certain distance from the nature, because it was the world where the humans should never go too close. When they have to enter into the nature, they should never stay for a long time.